

Takeshi Kakehashi

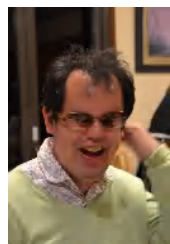
Official fan club

News letter No. 17



ご挨拶と近況

梯 剛之



新緑の清々しい気持ちの良い季節になってきました。
皆さまにはお元気でお過ごしですか。

昨年は皆さまにご心配をおかけしました。辛いこともありましたが、今は作曲家の心や想いに如何に近づけるか様々な角度から研究し元気にピアノに臨む毎日です。いつも支えて下さる皆さまに心から感謝しています。

この会報が皆さまのお手許に届く頃、僕はオーストリアで昨年暮れに皆さまにご披露したヴルガング・ダヴィッドさんとの演奏に臨みます。オーストリアは第二の故郷ですから、鳥の声や森のざわめきなどを満喫しながら、音楽も人との繋がりも大事に温めて夏以降の日本での演奏に備えたいと思っています。

今回の誌面には、ギタリストの伊東福雄さんとの対談を掲載して貰いました。ジャンルは違いますが、音楽を追求する者として、また人生の先輩として深く楽しいお話が出来ました。僕の音楽への想い、演奏家としての思いをこうした対談からもお伝えすることが出来るなら、こんなに嬉しいことはありません。

会員の皆さまの平和で豊かな毎日を祈り、演奏会でまた元気でお目にかかれますことを楽しみに精進して参ります。

今回はギタリストの伊東福雄さんに対談をお願いしました。“音”の専門家であるお二人は駄洒落の息もピッタリ(^0^)お会いするのは初めてでしたが、演奏家同士楽しくも深い話になりました。前篇・後編と分けてお届けいたします。(事務局)

§ 対談日：2014年1月12日（日） 場所：代々木 リンピック青少年センター §



伊東 今日はこちら、代々木の青少年センターで弾かれるわけですが、梯さんは色々なところでピアノを弾きますよね、いろんな環境で弾かれるので大変なことは？

梯 ピアノを弾くって人間関係と一緒にだなあ、と思うんです。その時々でそこにあるピアノは大事な相棒になるわけですから、神経を使います。人間関係と同じで、初対面からいきなり呼吸を合わせるとするのは難しい、最初はギクシャクしたところから探りながら次第に調和していくという時間が必要になります・・・従わせようとするとうまくいきませんから。

伊東 理想としては持って歩く？

剛之 いやあ、それはないですね。ピアノは家とかホールとか環境に合ったように置いてありますから。例えば、ヨーロッパで鳴っているなあと感じる

目次

Page 1

- ◆ご挨拶（梯 剛之）
- ◆対談（ギタリスト伊東福雄氏）

Page 2

Page 3

Page 4

Page 5

- ～対談（ギタリスト伊東福雄氏）

Page 6

Page 7

- ◆雑感（幣原映智氏）

Page 8

- ◆寄稿（廣田節子氏）

Page 9

- ◆子どもに伝えるクラシック
活動報告（加藤秀明委員長）

Page 10

Page 11

- ◆寄稿（松本節子氏）

Page 12

- ◆事務局便り



伊東氏は、実は加藤会長のギターの先生。対談風景。

ピアノでも日本に持ってくると違ったりすることもあるので、やはりそこに置いてあるピアノで何とかします。

伊東 学校などにも行かれますよね、その場合はホールと違って戸惑う部分もある？

梯 そうですねえ・・ただ、その戸惑いや辛さをどう愉しさに変えるか、ということが大事で、まずはそのピアノに「よろしくね」と言ってピアノに向かうんです。まず仲良くしないと思うようには鳴って欲らないんです。



伊東 ああ、辛いと思ってしまうと敵対しちゃうんですね。

青少年センターでの演奏プログラム

梯 そうなんですよ！そうならないようにね、相手の状態を静かに探るんです。例えば写真家の方が自然の動物や富士山や様々なものを撮るときに、今かいまかと毎日その被写体を待つわけですよ、それが現れた奇跡の瞬間を撮る・・富士山にかかる雲とか、エベレストの頂上で吹雪いているところから晴れた瞬間を捉える・・それは将に“奇跡”と対話する、というんでしょうか・・。ピアノはそこまでのことはないけれど、実はちょっと似ている、と思うんです。鳴りにくいな、と思ったらいろんな角度からアプローチする・・言ってみれば忍耐を持って対話していく度量とスケールがないとピアノと向き合えない・・と感じます。

伊東 なるほど、忍耐ですね。何でも対応できなくちゃいけないんですね。



梯 初めてのピアノでも100年の知己のように演じなければいけない訳ですから・・。

伊東 そうしたことはどこの地域、アメリカでもヨーロッパでも同じですか？

梯 それは同じです。

伊東 ヨーロッパの方がいいということはありませんか？

梯 ヨーロッパでもあてがわれたピアノがそれこそひどいものだったりしたこともあります。そうそう、僕が敬愛するアルフレッド・コルトーにも、吃驚だけど微笑ましいエピソードがあります。



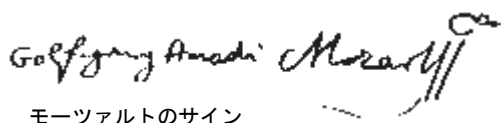
A. コルトー

第二次大戦後すぐに演奏旅行に行った場所で、電車に乗っていたら、今度何を弾くんだ？など聞いてきた人がいたそうで、一体何だろうこの人は？と不審に思っていたんです。その後会場に行ってみると出会ったピアノが思うように動かない・・戦後すぐですから、鍵盤が上がらないひどい状態のピアノはいたるところにあったそうなんです、修理の人もままならないという状況のまま本番を迎えるのですが、そのときに電車で弾く曲を聞いてきた人が一緒に舞台に出てきた、というんです。

伊東 えー、それはまた吃驚だったでしょうねえ。

梯 そうなんです、で、その人は何をしたかと言うと、曲を暗譜してきていて、瞬時に上がらない鍵盤のダンパーを持ち上げて曲にした、ということで、凄い話でしょう！？

伊東 うわあ、それはすごい！剛之さんはコルトーが好きなだけあって流石のエピソードご存知ですね。そうした非常時は勿論ですが、今でも様々なエピソードが生まれているのでしょうか。



モーツァルトのサイン

ところで、この前、CDで剛之さんのモーツァルト、ロンド聴きました。素晴らしいなと思いました。実は全音版の楽譜を見ながら聴かせてもらったんですが、表情が（楽譜と）大分違って。例えば楽譜ではffなのにpになっているとかいうよう

に、普通に教わって楽譜通り、通り一遍にやるとここはクレッシェンドだけとか、フォルテだから、とか・・で、習ったのとは違うな、という・・この違いっていうのは、それは剛之さん独自のイメージからですか？或いは伝統から？ヨーロッパにいらしたことが関係しているのでしょうか？

梯　そうですね、独自の解釈ということもありますし、ヨーロッパの感覚・・・伝統とか、モーツァルトが生まれ育ったザルツブルグの、彼が散歩したり遊んで居たところの空気を吸ったり・・・ウィーンもそうですが、森で小鳥のさえずりを聞いたときに、あ、これをモーツァルトは聞いたんだ、とひらめくことがあります。そこにある空気感とか森のざわめきとかの中で、どんな思いであの曲を作曲したのかを感覚的に捉えることができるんですね。　そうしたところをイメージしながら演奏するわけですが・・・



ザルツブルグ

伊東　やはりそうですか。

梯　それに、モーツァルトはそもそもがいたずら好きだし、こうした音楽を生み出した高尚な人ではあるんだけど、今の若いやんちゃなお兄ちゃん、謂わばヤンキーな部分もある人なんですよ。すごく自由で。だから、手段として楽譜は書いていますけれど、対話しているような感覚で音楽を作っているのでしょう。だから、いざ・・・例えば大勢の仲間や聴衆がいるような宮廷の演奏会などで、わざと楽譜と全然違うように表現して驚かせたり騒がせたりして、それまでも音楽にしてしまう、というくらいの感覚があるんですね。

伊東　なるほどねえ。そうするといつも同じ解釈で演奏するわけでもない？

梯　ええ・・・ただ、モーツァルトは自分の美学については煩くて、デタラメに自分の曲を解釈されるのは許せない、というところがあるんですよ。そのあたりは揺るぎないので、そこはまた難しい。



伊東　それこそ天才なんですね。話は変わりますが、中学入学時にウィーンにいらして、割とすぐに様々な賞を受けていますが、それは日本で学習したことが大きいということ？

梯　いや、それは向こうで学んだことが大きいです。そもそも音の響きがかなり違う。日本は概して空気に湿気が多いですが、ヨーロッパは雨が降っても湿気が少ない。そこが違いますし、教会とかの建物も大きく関係しているんでしょうね。1950年代以前の建物は天井が高いですから、響くと云ってもいい響き方をしますよね。音は普通上から響いてくるという感覚ありませんか？今回ヨーロッパに行って改めて発見したんですが、地面から音が立ち昇ってから（上から）音が降ってくる、という感覚。

伊東　なるほど。それはヨーロッパならではの、かなあ。こんな話もありますよ、拍手の仕方なんですけど、日本の拍手ってパチパチ！って感じでちょっと甲高い、一方、ヨーロッパはもっとポンポンという響く拍手というんでしょうか、指の第一関節位ずらすとそうなるんですが・・・

梯　確かに。そもそも空気が違う、さっき言ったように湿度が高いということと、僕の感じでは塩気が含まれていてちょっと重たいので、そうした拍手にすることで聞こえ易くする、ということがあるかも知れません。それに関係することで、この前マネジャーの金子さんとも日本人の発声のことで話をしたんですが、電車の車内放送で車掌さんが（セミの声に似た地声で）“うえ～次はア〇〇、次は〇〇う、お降りの方はあ～”とかスーパーや八百屋で呼び込みする声“えー、イラッシャイマセ～ラッシャイませえ～、本日（今日）の目玉はあ～”（声色を真似るー（笑）ー）という独特の声の出し方をしますよね、あれは日本のざわついた街中・・・車や人の喋り声、電車の走行音とか騒がしい、そんな中ではよく聞こえる周波数になっているんですって。それもし必要性から出てきたものなんでしょうね。



伊東　ほほう、そういうところをちゃんと考えているんですね。

またひとつ質問ですが、剛之さんは、長いことウィーンの先生についていたでしょう。先生がいつも言われる言葉で覚えている、或いは印象に残っている言葉はありますか。

梯　もちろんあります。“演奏する前にもうその世界を創りなさい”ということは良く言われました。“音を弾いた瞬間が音楽なのではなくて、それは途中の段階なんだ、演奏者は頭の中で常に演奏していて、コンツェルトなんかはピアノ・パートが終わったあともまだ終わっていないという精神的状況を創りなさい”とですね。



恩師ヴァイスハル先生

それと“ピアノッシモを大事に”と盛んに言われました。考えてみると向こうで森などに行くとブナの木だとか葉擦れの音が良く聞こえるような木々、一方杉だとかかすかにしか聞こえないような様々な樹があることで、そよぎの音、風のおおる音など高低様々な音が聞こえるんですけど、それ自体がもう交響曲のようで、囁くような音でもその構成に欠かせないんですね。

伊東 それは仰るとおりですね。ピアノッシモでもちゃんと聞こえるいい音を、ですね。そうしたことを若い人たちにレッスンしたり・・・ということなんかはあるんですか？

梯 それは最近始めました。“子どもに伝えるクラシック”という任意団体を作ったんです。DVD制作委員会の続きです。若い人たちにクラシックをより身近に感じて貰いたいと思って、例えば中学校に伺って自分も演奏するんですが、公開レッスンとして別の枠で生徒さんに弾いてもらって、ワンポイント・レッスンのような感じでアドヴァイスするんです。そうすると凄いですよ、すぐに音も曲想も変わってきます。それは嬉しいですね。



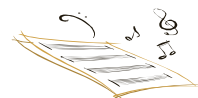
北海道緑陽中学校

伊東 若いから吸収もいいんでしょうね。剛之さんが一番教えたいポイント、と言ったらどういうことですか？

梯 楽譜を覚えたら、楽譜から頭を離す、如何に身体を使って音楽を創るか、手の躍動・肘の回転、下半身の安定、上半身の自由な動き・・・と言った大雑把な助言なんですけど、その3つ程のポイントを押さえれば少々ことは乗り越えられるのではないかと・・・実は自分が随分そのあたりのことで苦しんだことがあったんです。どういう使い方をしたら良いのかわからない・・・という状況に暫く陥っていましたから・・・。

伊東 あ、そんなことがあったんですか？

梯 そうなんです。手や身体をどういう使い方をしたら良いのか分からなくなったり・・・尤も自身に耳鳴り、身体に磁石が入って磁力が来るような感覚・・・10年以上に亘ってありました。一時期ピアノをやめようかと思ったことがあったほどですが、アフリカの太鼓を習ったりしているうちに、やっぱり自分の中でピアノに戻りたくなったんです。



伊東 ピアノが嫌いになったことも？

梯 4年近くそんな時期が続きましたね。ただ、全くピアノに触れていなかったということではなくて、子どもに伝えるクラシックのDVD制作など活動はしていましたし、リサイタルもやってはいたんです。そうしたことを通して、今はそこを大きく脱皮することが出来た。今は、プレッシャーを大きく感じた時には、この三つのポイントをきちっと押さえておけば大体のことは切り抜けられる、ということに気づいたことが助けになっています。



伊東 身体って大事ってことですよね。そういうことが関係するんでしょうか、昨年の紀尾井ホールでの最後の曲（リスト/ソナタ 口短調：事務局注）、あれ！ピアノ、ビブラートかかっている！と思った。チューニングを綿密にやっているように伺いましたが・・・。

梯 うわー、それは、大変嬉しい。チューニングのことも勿論ですが倍音の原理だろうと思いますね。低音が鳴ると他の弦が呼応して、いくつもの高い周波数で空気が振動していくんですが、その原理をどう活かしていくか、それをどういうふうにしたら聴かせることができるか。空気の周波数を最大限に利用してですね・・・いろいろ考えてある意味、重力の法則を利用する・・・という奏法にしよう、とずっと研究してきたんですが、漸く、ウゥゥゥ〜と空気が震えることでそのビブラートがかかる感じになって来たということでしょうか。

伊東 僕もギターをやるものですから、ビブラートは雰囲気をかけずに音楽としてよく考えて使ったほうが良いなと思っていたので、最後の音がフワアアと消えていくのを聴いて、これはニクい・・・掴まれちゃう！（笑）、という感じがしました。

梯 うわあ、それは有難うございます！嬉しいです。

伊東 それと、一般的に言って、基本は低音をしっかり弾いて、上にメロディを載せて、というバランスの中で演る、というのが基本だと思うんですけど、わざとそんなに低音を出さずにバランスを考えながらメロディを聴かせている、というようなことがありますか？

梯 それは作品によってですね。例えばリストのソナタだと低音をバンバン弾きますけど、逆にコンソレーションのような小さい淡い曲の場合は低音を響かせるより右手を聴かせる・・・というように。

梯 教わるものではなくて??

梯 ええ、それは自分で考えますね。勿論、いろんな優れた演奏家の、共感できるな、という演奏から得るところもあります。リストは基本的にバリエーションの遊び、みたいなことは許すタイプなんです。彼は、靈感がない、魂が感じられない演奏を最も嫌いますね。リストの楽曲を弾くためのテクニックは高度ですが、テクニックでも魂の底から湧き出てくる上に成り立っているものでないとダメだと言っているんですね。

伊東 超絶技巧を駆使したところと魂の部分と、そこは両立させることって大変なことでは？

梯 いやあ、仰るとおり、相反するわけですよ、だからもの凄く難しいわけです。ある意味、作曲者は演奏者を精神分裂に追い込んでいる、と思うようなことがありますよ（笑）

伊東 リストは自分でも演奏していたわけでしょう？本人が分裂気味ということはないですか？

梯 ありますね。彼自身もかなり重篤な躁鬱だったという話です。躁状態になると周りに絶対負けまいと決闘するくらいの勢いで、一方、神を崇め、あらゆる欲望から脱していかなければこの世界は残忍で野蛮だから音楽はそれを救済するような深遠なものでなければならない・・・ということを言いながら、タバコを吸ったり、アブサン（19世紀フランスの芸術家に流行した非常に強い薬草酒・当時は中毒症状も多かった：事務局注）を飲んだり、女性関係が凄かったり・・・分裂傾向って言うんですかね。

でも、妙に共感出来るところがある。一人の人間の中に天使と悪魔が住んでいるような・・・そういうところが又魅力なんですね。色気があって誘惑するようなところがあったり、隔絶した孤独の世界に身を置きたがっているようなところがあったり、社交的だったり、いろんな顔が見えてきて・・・

伊東 大きな人間っていうかんじ？

梯 そう大きな人間っていう感じです。

伊東 剛之さんはどういう人間になりたいの？（つづく：如何でしたか？ここから9月発行の次号に続きます。お楽しみに！！事務局）



伊東氏の著作

【対談を終えて】 ギタリスト 伊東 福雄



ファンの方々のまだ知らない剛之さんのことを掘り出してみたいとお話させていただいたので、対談と言うよりインタビュー的な立場にたち、更に私自身の勉強になればと思いながら進めて行きました。丁度フランツ・リストの本が出たので剛之さんのリスト観も大変参考になりました。

後編では「剛之さんはどういう人間になりたいの？」をテーマに、前向で且つ反骨精神に富んだ人間像が描けたのではないかと思います。私も剛之さん程の強さは持ち合わせていませんが、ピュアな面では私自身の垢も少し洗い流していただけたと嬉しく思っています。楽しさの追求面ではインタビュー後の打ち上げ会のせきで更に楽しい冗談が延々と続いたことをご報告しておきましょう。それだけウィーン生活の苦勞が人生にも音楽の隅々までもプラスの方向に出ているのだなあ、と共鳴を胸に家路についたという訳です。

これから更に一層、世界に羽ばたく剛之さんに期待いたします。



昨年10月18日、宝塚ベガ・ホールで開催されたチャリティーリサイタルにお越しいただいた幣原映智様から
 その感想を頂戴致しました。幣原様は元同志社女子大学教授（音楽美学担当）でいらっしゃいます。

雑 感

幣原 映智

1. ドビュッシー：月の光

これは詩に付曲した歌曲ではないが、若い頃のドビュッシーはヴェルレーヌの詩に心酔していたので、曲名は詩集『艶やかな宴』の「月の光」に由来することは確かである。因みに組曲の名称「ベルガマスク」も、その詩の第2行から借用された。従って、この曲が同名の詩の内容を描いているかどうかは不明とは言え、少なくとも作曲家は当時、ヴェルレーヌが同名の詩の中に表現しようとしたものに心を奪われていたことは確かであろう。詩は、例えば仮面を着装して歌い踊る陽気な「悦楽」と、その最中に覚える「空虚」との相反する「両面感情」（アンビヴァランス）を詠うが、そのような屈折した精神動向をこの曲の響きの中に聞き取ろうとすることは、あながち間違いではないだろう。ただし、私どもがこの曲に聞き取るのは情景や描写や物語ではなく、抽象的な情動の深い水準におけるアンビヴァランスである。

Clair de lune : Verlaine

Votre ame est un paysage choisi
 Que vont charmant masques et bergamasques
 Jouant du luth et dansant et quasi
 Tristes sous leurs deguisements fantasques.

ヴェルレーヌの詩「月の光」冒頭部分抜粋

静謐な月の光が世の表裏一切を照らすかのように、曲は静かに始まる。外面とはうらはらの内面とを共に捉える19世紀末の心情傾向を十全に歌う、見事な演奏である。演奏家の深い知性と磨き上げられた感性から生み出される音と和音は一瞬に移り変わるが、聴く者の心は響きに導かれて、充実の安らぎと欠落の不安、正と反との相面を去来する。曲の各楽節に進むたび、聴き手は気ままに、しかし自然に詩の情景を思い浮かべる。全ては演奏家の高い技術の賜物である。様々な事象と幻想の後、静かに冒頭主題の一部が再現し、分散和音が消え行くように曲の終わりを告げ、一切は「月の光に溶け、消える。」

響きへの没入から聴き手は我に還り、この曲は単独で、今日のプログラムの開幕の大役を十全に果たしたが、いずれ他の3曲と共に組曲の全曲を聴きたいと、身勝手な望みを胸の中で呟く。

2. モーツァルト：ピアノ・ソナタ 第11番 イ長調 K 331 第1楽章



「ソナタ」楽種では主要な楽章に「ソナタ（アレグロ）形式」が適用されることが多く、その楽章が楽曲全体に何らかの風格を添えていると思われるが、モーツァルトのこのソナタ第11番のいずれの楽章にも「ソナタ（アレグロ）形式」は用いられていない。この風変わりなソナタに対する期待は募り、緊張しつつ息を潜めて開始を待つ。

早くも第三、四小節で衝撃を受ける。演奏家が心をこめて弱音で、しかも極めて慎重に、控えめに8分音—4分音の組（3組）を奏でられ、そこにヤンボス（短—長格）のリズムを聞いた時である。この瞬間に、不覚にも、このリズムを枢軸としていわゆる「ロマン的」な解釈表現が展開されるのでは、という予感を抱き、却ってその表現領域へ関心と注意を向けた。しかしこのテーマ（変奏に対する主題）の後楽節に進んでも待ち受けたリズムの余韻や反響は薄く、ロマン的感情の専横や饒舌を聞くことはなかった。何故「控えめ」なのかという微かな疑念を残しながら、内心、「復古的解釈」への浅薄な期待を捨て去った頃、演奏は変奏部へ進み、そこで暫く、平明・端正な主題に対して多彩な変化の諸相を呈示する、古典的変奏を聞いていた。そこで新たな衝撃に襲われた。ひらめくように、響きに対峙する構えが変貌し、テーマでの「慎重・控えめのヤンボス」の深い意向を悟ると共に、変奏の中に「古典的変奏曲形式」を超えた重厚な意味と高い格調を実感していた。換言すれば、いわゆる旋律変奏乃至装飾変奏が動機変奏へと変容し、それどころか、ソナタ形式の展開部の域にまで高められるのである。全ては演奏家の深い知性と鋭い感性によって。もしテーマのヤンボスが明瞭に打たれたとすれば、聴き手は早くも第2変奏を期待し、曲の理解はその方向へと進んだであろう。また、もしヤンボスでなく、トロカイオス（長—短格）が印象づけられた

とすれば、聴き手は変奏部で、テーマとは対照的古典的な変奏を楽しんだであろう。そうでなく、弱音による暗示的呈示が、あるか無きかの関連性を保持し、却ってより強く、より明確に全体を捉えさせる。演奏のもたらず驚きは深い感動に結びつく。そして感動は演奏家に対する賞賛に一。優れた演奏に与る事が出来た僥倖を喜び、感謝しつつ、続く楽章を待つ。(第2, 3楽章の雑感は省略)

4. ショパン：バラード 第1番 op. 23

ショパンはパリでリスト、シューマン等の音楽家や各界の名士達に注目され、作曲家としても名声を高めていたが、1830年代の終わりに向けて、結核の病状が悪化し、また社交上の不運にも苦しみながら、新たな音楽の世界を開くために苦闘していた。1838年以降に、彼独自の楽種である、題名のないスケルツォ、バラード等が現れる。作曲家の創作時前後の内外の事象を捉え、作品との関わりを詮索・洞察することは、作品の理解に深みを与えるに違いない。殊にショパンの作品については、時代精神、伝記的生涯、様々な逸話と伝承等からしても、作品の文学的乃至物語的な理解への誘引は強い。しかし、このリサイタルではショパンの畢竟の名作であるバラード全曲を纏めて聴取することができる。この得難い機会にこそ、通俗的な詩的理解を捨て、標題のない器楽に相応しい聴き方、即ち、純粹に音楽形式に焦点を当て、先ずは音楽の構成面の詳細と大要を把握しようと心構えを立てる。



緊張の中、バラード第1番が始まる。低音のフォルテで上行する8度重音がやや下行して弱音で休止(無形式)、意味ありげな3音が、最初の憂愁のワルツを導く(ト短調)。この動機(装飾的な8分音5個と優美な付点2分音3個の連結)は美しく、繰り返されて、主題としての重要性を聴く者に印象づける。

やがて平行長調を経過して変化と一時的転調等の後、「意味ありげな3音」を想起させるバスに導かれて、ピアノシモで変ホ長調のワルツが現れ、付点2分音等が美しい旋律を歌う。続く四分音5個を含む付加楽句は、明らかに冒頭の主題動機に由来している。これら2様の楽句の連結の仕方は、短調のワルツの場合とは逆である。この楽句が次第に変形・上行の後、消えるように下行して、最初の憂愁のワルツを再現させる。更に主題のワルツはピアノシモからフォルテの動機の反復を経てフォルティシモで長調のワルツに進み(イ長調)、更に昂揚して平行8度の上行音型を繰り返して曲の頂点に至る。

ここまでで早くも驚くのは形式構成の合理性である。確かに主要な舞曲旋律や楽句は、変化音、変化和音、リズムの変化等に彩られ、主情的な、所謂「ショパン風」の感傷的な性格を帯びている。しかし聴取の欲求を情緒方向にのみ解き放つのでなく、知的な把握を確保すれば、主題の対比、楽句の連結、動機の関連性等、非常に理知的なその手法に気付く。

曲の頂点から、終結に向かって様々な楽句の組が現れるが、生動性と生氣は失われず、フォルティシモの最高音からの単音の下行の後、再々度、長調のワルツが力強く現れ(変ホ長調)、更に昂揚する。続く付加楽句も至福を讃えるように力強い。しかしその反復と変形の中に生氣を失い、過去の悪夢が甦ったかのようにピアノシモの憂愁のワルツに戻る。この暗い気分は静まるどころか、逆に高まり、急速の狂乱となって曲を閉じる。

このような形式は、具体的な事実や物語に比較あるいは照らし易い。しかしショパンは曲の筋書き、即ち内容については何も語らなかったとのことである。ロマン派の音楽家にとって音楽の内容としての感情は自明の事であった。内容の深化と激烈に見合う技法の洗練こそショパンの苦闘の対象であった。

他の3曲に触れることを断念し、4曲に亘って高く深い知と情の融合を見事に表現してくださった梯さんに心からの感謝と賛美を申し上げます。



11月28日に開催された、紀尾井ホールでのリサイタルにお越しになった廣田節子様にご寄稿いただきました。廣田様は書を基底とした美学を研究する大学教授でいらっしゃいます。

音のエスプリ

東京都 廣田 節子

2013年晩秋 11月28日 紀尾井ホール その日はわくわく胸おどらせて会場にむかいました 同じ時代を生きた二大作曲家 ショパンとリストの曲目でプログラムを知った時点で梯さんがどのように演奏されるのか興味津々でした

§ ショパンバラード全曲

ショパンであってショパンでない 私の期待をあっさりと裏切り あたかも青春の恋の発露とアンニュイな憂鬱さを それはそれは初々しく清々しい独特な音色で紡ぎ 詩情溢れるハーモニーで又力強いクライマックスに弾き挙げ 時空を超えて変わらぬ斬新さとエレガンスさで美しい緊張感を感じさせてくれました 初々しさが新鮮に生の喜びにつながり シンプルにストレートに私の心に入り込み 尚かつ深く心揺さぶるものがありました 思わず「梯さん お若い！」と呟いてしまいました そして クスッと笑ってしまう程のウィットにも溢れ 梯さんのお歳のわりにお若い（失礼！） 思いがけない程楽しい演奏に「自分自身が楽しめないと魂は解放されない」という禅の教えを思い起こし 梯さんご自身のお心が辿り着いた 自我を超えた自由の境地では と感じ ショパンであってショパンでない 将に梯さんのバラードであったと確信 その精神性の高い音色に酔いしました



紀尾井ホール LIVE
CDジャケット（販売
詳細/事務局だより）

§ リストのソナタ

ダイナミックで華麗 将に交響曲を聴いているが如くスケールの大きさを感じ 高音の美しさは謂うまでもなく 特に左手の唄わせ方と巧みなペダルの使い方によって 媚びず 豪放的で 劇的な音色を生み出し ある意味凄みを感じました！ 絵画でも音楽でも熟達して来ると色々な想いが入りすぎて いやに重くなったり 煩くなったり 又媚びたり としてくるものですが 梯さんの演奏は 其れを飛び超えて卓越した世界観を指し示してくださいました



オーケストラ的厚重感を持ち乍ら 胸を透くような爽快感で 音が幾重にも重なり複雑ではあるがその奥行が深い 精神性を高め 我々聴く者の心を満たしてくれました 自他を超越したおおいなる心 自分と世界とを限りなく一体化し 大いなる流れに移り変わって行く事に 力まず逆らわず ひたむきに情熱を持って一つ一つを創り上げてきた温かい慈しみ その心が大きなうねりとなり 広い宇宙の外側から 我々のいる位置を大きく包み込み 慈しみの心で満たしてくれました その音の精神性の高さに 胸が大きく揺さぶられ 思わず涙しました

帰る道すがら 木枯らしが吹き始めもう冬になろうとしている夜空を見上げると 神々しい程に澄んだ月が照っていました その月を眺めながら今日の演奏と想いが同化し 私が生涯の心の拠り所とする一首が思い浮かびました

月影の至らぬ里はなけれども 眺むる人の心にぞ住む（法然上人）

※自己と世界（宇宙）を限りなくひとつにして達観して行く ひとりひとりの心の中にこそ 仏（神）が居て悟りがある と云う意味で 慈愛の深さをうたった一首

家に着く頃には 梯さんの持つ音のエスプリによって心揺さぶられ 心臓をわしづかみにされ涙した大きなうねりが 静かに心の奥底の琴線にふれ 昨日まで不満たらたらだった私の心がすっかり浄化されて明日への希望と元気の力に変わって行きました

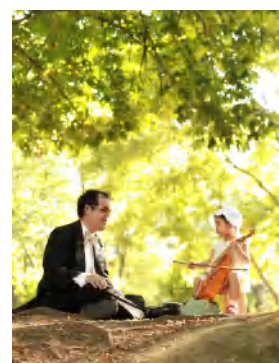
2012年横浜みなとみらいではショパンのピアノコンチェルトで梯さんの熱き血潮の漲った情熱的人間臭さにふれ嬉し泣きしましたが 今回は其れを遥かに超えた感動 大いなる愛—慈愛と云った方が的確かと—で我々聴く者の心を包んでくださった 彼の音のエスプリの高さに乾杯！！



子どもに伝えるクラシック 活動

2014年度のご報告

運営委員長 加藤 秀明



昨年7月に”子どもに伝えるクラシックDVD制作委員会”から引き継ぐ形で梯剛之さんを代表とした任意団体「子どもに伝えるクラシック」を立ち上げました。

お知らせ以降、たくさんの個人、法人の皆さまからご賛同・ご支援を賜り、誠に有難うございました。誌面を借りて心から御礼申し上げます。

ご寄付等含む収支報告書は5月初旬公開予定の任意団体HPにて発表致します。今年度は、自主公演は3回でしたが、主旨をご認識いただきつつ招聘頂いた演奏含め、全6回になりました。

♪2013年6月／北海道 緑陽中学校

♪2013年9月／北海道 札幌大谷高校

♪2013年12月／福島県復興支援コンサート ポリス保険看護学院メグレスホール（主催：同実行委員会）

♪2014年2月／山口県川棚 コルトホール 小学校児童対象（主催：公益財団法人下関市文化振興財団）

♪2014年2月／復興支援・UTAU DAIKUへの協力 東京：サロン・デュオ

♪2014年3月／下関市 下関南高校管弦楽部との共演（主催：公益財団法人下関市文化振興財団）

梯さんと共に本年度の活動を振返り、改めて一層心を込めてこの活動を志すことを確認致しました。

♡子どもに伝えるクラシック事務局より♡

この活動は、主として学校や被災地でのコンサート活動が中心となります。梯さんご自身のピアノ演奏に自身の演奏家となるまでの生きてきた軌跡、演奏曲の作曲家とその生きた時代背景、人物像、作曲家の想いなどを語ります。そのスピーチを通し、梯さん人生にじかに触れることで、生きる勇気や感動を持っていただいたり、クラシック音楽をより識るきっかけとなったら、と願っています。会員の皆さまの母校やご関係先など、希望される学校がありましたら是非お気軽に下記事務局までご相談ください。

事務局 Mail: info@classic for Children

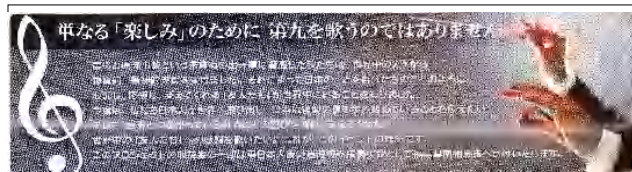
◆東日本大震災復興支援チャリティー・サロン・コンサートを開催しました◆

去る2月28日、チャリティー・コンサートを開催しました。急遽決定したにも拘わらず60名の方々が満席になりました。お越しいただきました皆さま、サロンをご提供頂きましたClassic for Japan関係者様、現場で尚ご寄付戴きました皆さま、そのご協力・ご支援に主催者一同、こころから御礼申し上げます。

主催：梯剛之の東日本大震災復興支援チャリティーコンサート実行委員会 於：東京「サロン・デュオ」
演奏曲：モーツァルト：ロンド／シューマン：子どもの情景／ショパン：前奏曲より



このコンサートは、東北被災地の仮設住宅に暮らす合唱団員10名の方が、3月5日ウィーンの楽友協会で開催の“ベートーヴェンの第九／合唱”に参加される、と知った梯さんが、そのサポートを行っている（財）Classic for Japan (CFJ)に協力し急遽チャリティーコンサートを開催すると決めたものでした。CFJに対し梯さんは売上の全てを、また、任意団体からも別途、寄附を行いました。このウィーンでの合唱は（社）世界音楽合唱チャリティー協会が東日本大震災復興支援プログラムを推進する一環として、第1回「UTAU DAIKU in WIEN」と題し、オーストリア大統領の名誉特別後援をいただいて実施したものです。NHKニュースにもなったこのコンサートでは、著名なソリスト、ウィーン少年合唱団、世界で活躍する男声合唱団が参加、南相馬の中高生合唱団、今回支援した参加者が共に第九を歌い上げ被災地への祈りと日頃の友好を確認しあった、と梯さん、実行委員会宛、現地関係者から報告がありました。



主催：（社）世界音楽合唱チャリティー協会
共催：オーストリア政府観光局
後援：オーストリア大統領名誉特別後援
オーストリア大使館、観光庁、日奥文化協会 他

<UTAU DAIKU in WIEN案内チラシ/ WEB <http://www.utau-daiku.jp/index.html> から>

ご縁あって山口県下関で今年、2月と3月に、梯剛之さんが大好きな子ども達へ音楽を語り演奏するという音楽会と、高校の生徒さん達と共同で音楽を創り上げる“コンチェルト”の入ったコンサートが開催されました。この二つのコンサートは“子どもに伝えるクラシック”としての演奏会ではないのですが、その理念に沿ったものである為、ご相談の上現地に行かれた小平市の松本様にその様子をこの頁にご寄稿いただきました。

下関 ふたつのコンサート紀行

小平市 松本節子



§ 川棚コルトーホールでの演奏会 §



梯ファンならどなたでも、彼が往年の名ピアニスト、アルフレッド・コルトーを深く敬愛していることをご存じでしょう。

そのコルトーの名を冠したこのホールで開催された、川棚小学校の児童対象の演奏会に行くことができました。演奏は、児童たちに分かりやすく、という配慮なのでしょう、曲の紹介を梯さんが行い、すぐ後にその曲を弾くというものでした。

思いに溢れるお話の後の演奏、、、さすが集中の途切れることなく、コルトーが愛した同じ場所にいるという梯さんの感動が音になってホールを満たしました。私は最後列の席にいて、児童の様子がよく見えたのですが、全員が全員、身じろぎもせずじっとしたかという、そこは子どものこと、特にお話の間はつきあったり、目配せし合ったり、落ち着かない子もいます。でも、ひとたびピアノが鳴り出すと、皆、その音に集中していつているのがよく分かりました。



コルトーホールでの子ども達

最後は代表の児童のお礼の言葉でした。実はそれはその時の言葉というわけではなく、前もって用意してあったのですが（子どもに伝えるクラシックのDVDや道徳の教材で梯さんについての予習をしていたことも分かりました）、最初の内こそぎこちなく読んでいたその言葉が、次第にその場の自分の思いを伝えるものになっていったのには、思わず胸が熱くなりました。梯さんもく元気にしてくれる言葉をありがとうという趣旨の言葉を返して、それがまた会場を一つにしてくれました。ピアニストの演奏は初めて、という児童がほとんどだったろうと思うと、その最初のときに梯剛之の音に出会えた彼らを、本当にうらやましく思わずにいられませんでした。

このコンサートでたまたまお隣においでの方と演奏の合間にお話をしましたが、その方は梯さんの音を素晴らしいと言われ、さらに、こんなよい生の演奏に触れられた子どもたちは幸せですね、と私の思っていたそのままを口にされていました。自分が大切に思っていることが認められたうれしさをかみしめつつ、川棚を後にしました。

《演奏曲》ドビュッシー映像より「運動」/ ショパンノクターン2番 / ショパン練習曲より「別れの曲」「黒鍵」「木枯らし」/ シューマン子供の情景より No.1「異国から」No.2「珍しい話」No.3「鬼ごっこ」No.4「おねだり」

§ 橋元才平翁記念第16回ファミリーコンサート §

～梯剛之ピアノリサイタル 共演：山口県立下関南高校管弦楽部 於：下関市民会館～

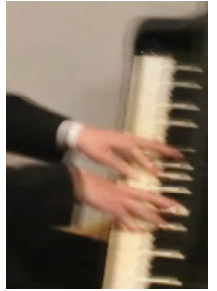


このリサイタルは、前半がピアノ独奏で＜子供の情景＞、後半は下関南高校管弦楽部の演奏、ついでショパン＜ピアノ協奏曲第一番＞を同管弦楽部と共演という構成でした。

シューマンの珠玉のようなピアノ曲集＜子供の情景＞は、意外に演奏を聴く機会がありません。子供の日常を、一段次元の違うところから見るような、楽譜上のテクニック以上のものが必要な連作ということを改めて気づかされた、詩情豊かな演奏でした。

高校生たちの演奏＜こうもり＞序曲が終わりいよいよショパンの協奏曲。⇒

梯さんが高校生のオケとどう折り合いをつけるのか、ちょっと手に汗握る思いで聴き始めましたが、気がつくとショパンの、というか、梯剛之の世界に、オケも聴衆も引き込まれていました。ちょうど甲子園の高校野球のすがすがしさ、それが梯さんによって引き出された、という感じかもしれません。梯さんの中から湧き出るようなピアノの音がオケの糸を紡ぎだし、本当に高校生たちは頑張っている弾ききった、という印象でした。こんな澁刺としたショパンの協奏曲は、二度と聴くことがないでしょう。下関のこの音楽会に来てよかった、と心から思いました。



演奏終了後、梯さんはここでも、川棚、宇部、下関と、コルトーが演奏したゆかりの地の近くで演奏できたことが力になった、と語っていたのが心に残りました。いつかまたこの地で、さらに音楽世界を大きくした梯さんの演奏を聴きたいものです。

“子どもに伝えるクラシック” ご寄付について

梯さんが代表となって活動を開始した“子どもに伝えるクラシック”の活動は非営利任意団体です。活動へのご寄付、ご支援を頂けますと有難く、コンサート会場、お振込によるご寄付を受け付けております。いただきましたご寄付は、交通費など実質活動経費として有効に使わせていただき、毎期末（各年3月末）を以て1年間の収支報告書を、HP上（2014年5月公開予定）に掲載しご報告に代えさせていただきます。

【振込先 三井住友銀行 国立支店 普通預金 No. 8043907 名義：子供に伝えるクラシック 代表 梯剛之】

PHOTO & NEWS GALLERY

音楽の友

「音楽の友2月号」11月28日紀尾井ホール演奏 (評・野平多美様)

「音楽の友2月号」11月28日紀尾井ホール演奏 (評・野平多美様)

山口ピアノニスト様さん、会場のコルトーホールで演奏

山口ピアノニスト様さん、会場のコルトーホールで演奏

朝日新聞山口支局／デジタル記事

イベント・レポート「ミ」

「ミ」の演奏とコルトーと並んで演奏しているのが、コルトーの魂「厚島に眠る」

「ミ」の演奏とコルトーと並んで演奏しているのが、コルトーの魂「厚島に眠る」

“音楽の友4月号”
この4月発売中。
コルトーホール&
下関南高校との共演

コルトーの魂「厚島に眠る」
梯さんの感動川棚に勇気

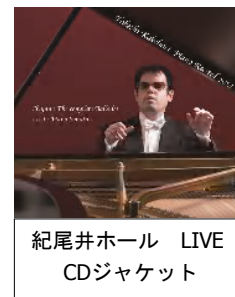
コルトーの魂「厚島に眠る」
梯さんの感動川棚に勇気

朝日新聞山口版

事務局便り



LIVE-CD情報 “紀尾井ホール・リサイタル” “JTホール・デュオ”



♪ 2013年11月28日紀尾井ホールでのリサイタル・ライブ CD／6月21日、ソナーレから発売。

《梯 剛之 ピアノ・リサイタル2013》

2013年11月28日 紀尾井ホールライブ・レコーディング アソール含め全曲収録

プロデューサー：金子哲理 エンジニア：馬場哲夫

【収録曲】ショパン：バラード全4曲／リスト：ピアノ・ソナタ／

リスト：コンソレーション（慰め）第3番／ショパン：ノクターン 嬰ハ短調 遺作

※ライナーノーツは「音楽の友」に素晴らしいご批評を頂いた野平多美様がお引き受けくださったそうです。

♥上記CDの先行予約を受け付けます。下記事務局までお申し込みください。ハガキでも結構です♥

市販価格2,400円税別⇒会員割引税込2,300円。CD本体に併せて振込用紙を同封して送付します。

E-mail: s100yamanaka@gem.hi-ho.ne.jp

FAX : 042-637-6489 (お名前、ご住所、電話番号を記載してください)

♪ 《予告》2013年12月18日JTホール 《ヴォルフガング・グ・ヴィット (Vn) とのデュオ・リサイタル ライブ CD

今秋、ソナーレより発売予定。「価格未定」次号にて詳細お知らせします。

【収録曲】モーツァルト：ヴァイオリン・ソナタ 長調K.379／シューベルト：ヴァイオリン・ソナタ イ長調 D.574、
ベートーヴェン：ヴァイオリン・ソナタ 第9番「クロイツェル」



サロンコンサート&会員懇親会を開催しました



去る1月、会員の皆さまへの日頃の感謝の意を込めたサロンコンサートを開催しました。

【演奏曲】

☆モーツァルト サルティの主題による変奏曲

☆ドビュッシー 映像第一集より 水の反映

☆シューマン 子供の情景 1番～4番

☆ショパン 前奏曲 9番～17番

ご参加の60名の方々が梯さんのピアノに聴き入り、引き続き

同じ場所で懇親会を実施。初めての方同士でもお隣と和気藹々、梯さんも各テーブルを廻って親しく愉しくダジャレ満開のコンサートと会合になりました。

【日時】2014年1月11日（土）13：00～16：00

【場所】東京都港区六本木 デザインKホール



事務局からのお願い

1. 前回の年会費振込から1年以上経過している会員さまには、年会費の振込用紙を同封していますので宜しくお願いします。
2. 事務局からのお知らせについて、携帯アドレスをご登録いただいている方の多くが容量オーバーで撥ねられています。別にパソコンをお持ちの方は、是非そのアドレスを事務局までご連絡をお願いします。

編集発行 2014年4月吉日

梯 剛之 オフィシャルファンクラブ事務局

事務局長 山中 重夫

〒192-0913 東京都八王子市北野台2-10-5

e-mail: s100yamanaka@gem.hi-ho.ne.jp

FAX 042-637-6489

協力：NPO 子どもに伝えるクラシック

米沢信用金庫



“子どもに伝えるクラシック”

HP準備中。来る5月初旬公開予定です。

梯剛之公式HPもご覧ください。

<http://kakehashi-takeshi.com/JA/index.html>